

アグリ | ワーク | ポイント



茶指導販売課 福手裕三

来春の一番茶に向けて

これから秋にかけて、光合成が最も盛んに行われます。この時期の葉量が樹勢維持や貯蔵養分蓄積に重要な役割を果たし、来春の一番茶の生産に大きく影響します。この時期に生育した葉は、母葉として来春の生産を左右します。健全葉を多くつけておくためにも、病害虫の防除や土壌中の養分管理、水分管理などの茶園管理が重要です。

中切り更新園の処理

一番茶後に中切り更新した茶園は、60〜70日後になるとかなりの再生芽が伸びていると思います。再生芽をそのまま放置しておくとも芽数が減少するので、中切り面より3〜5cm程（2葉くらい）残した位置で整枝すると、芽数が増え来年の一番茶の減収を少なくすることができます。

病虫害防除

二番茶摘採後〜三番茶萌芽期の防除

7月上中旬はコカクモンハマキ、チャハマキの第二世代幼虫の発生時期です。各地の誘蛾灯やフェロモントラップで発生時期を把握し、適期に防除しましょう。二番茶摘採後に降雨が多い場合は、山間部を中心に輪斑病が多発する可能性があります。輪斑病菌は、摘採時にできた葉や茎の傷口より入り込み、5日前後で発病します。摘採後の早めの防除が必要です。

三番茶萌芽期〜開葉期の防除

チャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマは、高温で乾燥した気候が続くと多発します。この時期は、10〜20日で卵から成虫になり、成虫でも20日以上生存します。多発園は2回防除が必要です。降雨が多い場合は、炭そ病や山間部でもち病が多発します。開葉期と2〜3葉期の2回散布が効果的です。

土壌肥料

二番茶を摘採すると、根の生育と養分の吸収が活発になり、三番茶の準備を始めます。この時期の茶樹中の養分は、一番茶、二番茶に回されて減っているため、スムーズな養分吸収が必要です。しかし、梅雨時期の一時期に多量の雨が降ると、土壌中の養分が流れて窒素濃度が下がってしまうことがあるので、緩効性肥料や有機性肥料などを使い、肥料切れを起こさないようにしましょう。